

校の経験から明らかである。手段はけつして目的と同一ではない、新しい課程をつくることや課程の修正ということは、単に目的に対する手段にしかすぎない。学校が求めている最終の成果は、民主主義社会における教育計画の目標の中に見出さるべきである。

四 指導の対象と時期

1 デス・モアヌスのスコープとシーケンス

デス・モアヌスのルーズベルト・ハイスタールの第一〇学年、第一一学年でぶつかった特別な問題について検討することにする。一九三六年にその学校は特別な生徒集団をつくり、これらの生徒達と仕事をするための教師をきめ、彼らのためのカリキュラムを計画した。そのカリキュラムは、国語、社会科学融合ないし文化エボック構成法とよばれた。この計画では、一〇学年には世界文明を、一一学年では、アメリカの文化遺産について学習することになっており、またこの課程では歴史のないし年代的な構成をとり、歴史学習と並んで、それに関係する文学が（時には美術・音楽が）学習できるような仕組になっていて、口頭および文章による表現能力をのばす機会もあたえられていた。ところで、そこでとりあげられる歴史の教材は、一冊の教科書からとってこられたものではなく、学校に備えつけられている数冊の教科書からとってこられたが、その教材はかなり伝統的なもので、これと非調をあわせて学習される文学は古典的な作品がとりあげられた。このようにして、諸課程の教科内容の大部分は、当の教師以外のひとびとによって、教養のある人には少なくともこれくらいのこと、知っておく必要があるという理由から、あらかじめきめられていた。

ところが、一方普通の学期よりながい期間生徒と一しょに活動して、個人としての生徒を知るようになると、前にもまして生徒の要求や関心に注意をはらうようになった。もっとも教師は、はじめから生徒の中に共同・寛容・自信といったこのましい特質をのぼすことを基礎的な仕事だと考えて、生徒の行動記録もありきたりのものでなく、一定のこのましい能力・態度・技能それと、目標に向ってどの位進んだかという、ひとりひとりの進捗状態が記録されていった。これらの記録をもとにし、資料を集め、新しい種類の学級設備をととのえ、さらに教材内容を変更することが、のぞましいのではないかという示唆も生れてきたのである。この傾向は生徒のたてる計画や生徒のイニシヤティブということを検討していけばいくほど、学習している教材に対する疑問や、教材内容の変更を求める自発的な意見もより多くあらわれるにいった。

この新しい仕事にたずさわったデス・モアヌスの教師の大部分は、一九三七年のブロンクスビル集會に出席して、例の『一般教育の科学』でとられたカリキュラム再構成の方法を注意深く学んだ結果、デス・モアヌスの課程に含まれている問題の一つの側面を明らかにすることができた。すなわちそれは、民主社会に生活する青少年の要求に直接注意をむけることの必要性についてである。かれらがこれに従って、課程内容の決定要素として生活の基礎的な側面をとりあげようとしたとき、そこであらゆる古い困難と多くの新しい問題にぶつかった。かれらは、その夏と、翌年ずっと時間のゆるすかぎり、生徒の要求にもとづいた満足のいく作業單元をつくらうと努力した。しかしそこには、一方ではあらかじめ決定された單元と、生徒を計画に参加させるということの間の、また、生徒の要求の直接的な性格とおとなたちの要求に基礎をおいた内容の間接的な価値との間の二重の矛盾がまちかまえていた。

矛盾をどうとりあげたか

これらの矛盾は、カリキュラムの再構成にあたっては非常に重要なことからである。教育の本質的な必要性という点から、内容の指導ということにだけならされてきた教師には、内容を順序正しい形で学習者に教えるということとで足りていたし、そのような教授の形式は教科領域の内部的な論理からはあたりまえのことだった。だから指導の方法は、歴史ならば過去から現在へ、文法ならば基本構造から応用へといういき方をとってやってきたのである。

だが青少年には、知的な結論に到達するにも、効果的な社会参加を実現するにも、練習と実践が必要なのである。もう一つの矛盾がある。おとなにとっては、青少年の要求や関心が氷結性がないように思えるのである。「おとなは今日のための教育」というと当然現代の問題と関連させて考えるものだ、とすると、ペソードがいうように、現代というやつは、いつも皮相的なものだからな……」と考えるのである。ところが他方、明日のための教育には、今学習している知識や技能は明日役に立つのだという予想がどうしても入りこんでくる。このことは、教師は、現在直接使われないものでも、今日生徒が学ぶように指導できるんだというおかしな仮定や、もしそれを今日学んだならばきつといつか使う時がくるのだからというので、それまで記憶しておくことを期待しなければならないというあやふやさをもっている。

デス・モアヌスは矛盾をどう解決したか

デス・モアヌスの教師たちはこうした矛盾に対する解決法を見出した。第一の解決は、上にのべた一つの矛盾に對してである。「一般教育における科学」で強調された生活の基礎的な領域の表——個人生活・個人——社会諸関係・社会——公民的關係・経済關係——は、内容を決定する要素として、またカリキュラムのスコープとして役立つ

たなかったので、研究や討議をかさねたのち、右のミシシッピー州カリキュラム委員会の研究を基礎にして、そこでとりあげられている生活領域の変形したものを採用することになった。それは次のようなものである。

- 1 生命と健康の保護
- 2 生計をたてること
- 3 家庭をつくること
- 4 宗教的衝動の表現
- 5 莫やレクリエーションに対する欲求の充足
- 6 教育の保証
- 7 社会的、公民的活動への協力
- 8 物的条件の改善

この表は、青少年の要求をグループイングする範疇として便利だったし、彼らの直接的な要求と、望ましい「教材とを結びつけるにも役立った。だから当然、教材は、青少年の要求を満たすために十分活用することができた。また、あらかじめ定められた内容の学習と、学習を生徒と教師の共同計画によって進める方法との間の矛盾は、資料単元の利用と改善によってのぞかれた。というのは、この八領域の設定には、あらかじめ資料単元をそれぞれ領域にふくませてあったからで、しかもその資料単元は特別のものでなく（資料・施設用具・活動・諸規則・参考書等のような）教授のための資料目録のようなものだったので、教授は授業時間に先だって準備することができらうに、子どもの選択の機会を十分に与えられるようなものであった。だからそれは一方では、教師には教職というものの考え方を保証し、他方、生徒には生徒の共同計画ができる場をあたえることになった。

2 明日のための教育か、今日のための教育か

ハイスクールで教えるべきものは何か、また省くべきものは何かという問題に対して、變革的な考え方がだんだんひろがってきている。今まで、このようなことは、特殊な内容領域の専門的な研究者によって構成された、国家的な委員会できめられていたし、またコース・オブ・スタディは州のコース・オブ・スタディが同一であるということは、きつとすばらしい結果を生みだすにちがいないという宗教的な希望からつくられていた。こうして、深く考えることを妨げられていた教師は、ただおとなしく、手わたされた教科書をつかい、それが生徒にばらばらに吸収されてもほっておくよりしかたがなかった。だがいよいよ多くの教師は、地域の特異性、生徒の欲求・興味・教師のよしあしという三つの要素が「何を教えるべきか」ということを決定するにあたって是非とも考慮されなければならぬと信ずるようになってきた。というのは、結局、学級の教師こそがこういったことを知る資料をもったただひとり人間であり、したがって、教師は、何を教えるべきかを決定しなければならぬ最後の人間だからである。

教師が生徒集団の教育にたずさわりスコープの問題にぶつかったとき、それを決定するのに三つの方法がある。一つは、今までどおりの方法で教えることができるということ。次はおとなになって世間のことから無理していくときに必要だと思われる知識・技能・能力および態度を決定し、それを自分の生徒に教えることもできる。三番目の方法は、自分の生徒が現在もっている要求を確かめ、その要求を満すのに必要な知識・技能・能力および態度を教えることである。結局、教育は、昨日・今日・明日のうちのいつのためのものなのかということからきている。

昨日のための教育についてはとりあげる必要はないが、スコープを決定するためにはあとの二つを問題にしなければならぬ。明日のための教育というのは、社会がおとなをつくらうとする要求がみられることから、それは「社会的要求構成法」というレッテルがはられるであろうが、他方今日のための教育には、「青少年の欲求による構成法」もつと簡単に「欲求構成法」という形でとりあげることができる。

(一) 社会的要求構成法

社会の要求をきめていくのにはさまざまな分析の方法が用いられている。ポビットおよびそのスタッフは、一九二〇年頃に、ロスアンゼルスカリキュラムの基礎をつくるために、職業分析をおこなって、おとなたちが従事している数千のそれぞれの職業活動の表をつくって、それをいくつかの範囲にわけ、それをもとにして、カリキュラムのスコープを決定した。また、マインシャルは個人の説き物・研究・人生観の調査をもとにして、社会に作用する基礎的な社会過程の表をつくり、それをカリキュラム作成の加除基準の資料とした。一方フレデリックに指導されたミンシッピー委員会は、社会活動の分析をおこなって、それを四〇項目に整理し、重複をのぞいたり、二、三手を加えて、人間活動を九つの主要領域にわけて、その領域表をもとにして、ミンシッピーカリキュラムを計画した。結局どの方法も、社会的要求を分析して、カリキュラム構成の基礎として役立つ四乃至一五位の項目を次にあらわすという手続きをとっている。

カリキュラム・チャート

カリキュラム委員会が、以上のように人間の活動領域をいくつかに分けると、次にはそれぞれの領域をどのように論理的に展開していくかを決定するために、もしくは、それが個人の上におよばされた時、それにどう取りくむ

か、また、それをどう処理するかをはっきりさせるために、さらに細かい分析がおこなわれる。この分析の結果はそこでさまざまな学年に割りあてられ、生徒はそれぞれの領域を十分に理解するために、問題を横のひろがりにおいて、またつながりのあるものは策的に学習することになる。このようにして、たとえば「生命の保護と健康」という領域は第七学年では家庭における安全という形で、第八学年では学校および地域における安全、第九学年では都市の保健計画、第一〇学年では州の責任、第一・第二学年では国家的および世界的問題としての保健ということが、それぞれとりあげられて学習されることになるのである。同様なことがそれぞれの領域でおこなわれるから、もし、文化の要素や生活の領域を横の枠とし、学年を縦の柱とすると、一目である特定の学年のカリキュラムの表ができるわけである。

あらかじめ定められたスコープおよびシークエンスの利点

以上のように、指導に先だってスコープおよびシークエンスを決定することは、明らかにいくつかの利点をもっている。そのうちで、最も重要な点は、それが教師の大きな保証になるということである。われわれがそのことを証明しようがしまいが、大部分の教師は、一定の内容領域を習得するように教育されてきたからである。このことが彼らの職業人としての存在理由になるし、また彼らと素人とを区別する差異にもなるものである。

一般に、伝統的カリキュラムの無益さを知るようになった教師たちは、社会的要求カリキュラムへの変動をよるこび、それに勇氣づけられている。しかし、まだ青少年の欲求によるカリキュラム構成法に対しては、そのもつ非予言性のゆえにしりごみして、どうしても社会的要求構成法の方へ近づいていく。これは、前にも述べたように後者には、教師が教えるべき内容が社会的要求としてたしかな保証をあたえているからで、この保守的な傾向は、教師たちが、教育の基本的な成果は習得された内容においてでなく、行動の変化という点から評価されなければならない

らないのだということを知るまでつづくだらう。

青少年の欲求にもとづくカリキュラムの構成法よりも、社会的要求にもとづくカリキュラムの構成法の方がもっている第二の利点は、内容の重要性を両親、素人、さらに保守的な教師にも容易にしめすことができる、ということである。欲求構成法が用いられる場合、内容の妥当性は直接的な学習の場いかにかかっているところ、内容が社会の要求にもとづいているときは、おとなはあえてそれを承認するだらう。だからこの利点は、明らかに便宜主義の一つである。

シークエンスがあらかじめ定められているときの第三の利点は、指導のための教材がすぐ集められ利用できるというところにある。事実、多くの教材は青少年の関心のあるところに見られる以上に大人の社会のさまざまな側面に役立っているのだから、前もってシークエンスをきめておけば、これらの教材と、それを効果的に使うための計画をする十分な時間を保証してくれる。だが、欲求構成法を用いる教師が全くの御都合主義を強いられたときは、このような保証すら捨て去らなければならない。だが、研究会では、二つのうちのいずれの構成法をとっても、おたがいが承認したスコープの中にある全部あるいはいくつかの問題に使うことができる資料を集めてくるのに役立つ資料單元は設定できるのだ、という傾向がある。

あらかじめ定められたスコープおよびシークエンスの欠陥

各学年で学習される領域がひとたびカリキュラム表(チャート)できめられ、実行にうつされてしまうと、これらの領域はとくに固定してしまう傾向をもっている。スコープがおとなの社会の要求によって決定され、学習の順序が論理的・演繹的な分析によってきめられるとよい指導にとつて必要な復習はその場を見出すことが困難になる。社会的要求構成法は特定の学年で扱われた領域や問題を生徒が再びとりあげて学習する意欲はもっていないだらう

という考えをとる。

たいていのシーケンス表が生活や経験の論理的で規則正しい形を予想しているところから、他のもう一つの欠陥がうまれる。生徒が地域のサークルを研究しているとき、このような研究ならば十分満足のいくものになるのだがということがわかっていても、彼らは国家・国民・世界の接触がないし、またそれらを知ろうとする欲求ももっていないという欠陥である。だから理想的なカリキュラムは現在生徒が関心をもっていることがらについての知的な決定ができるように、歴史的なもの、基本的な資料を動員しながら、さらに、直接的なものや現代的なものを機能的に活用できるようなものである。

最後に、成人の社会的要求にもつづいたカリキュラムは、当然研究されなければならない予言の可能性・動機づけ・持続性といったことがらについては、仮説の域をでていないという欠陥がある。おとなにとってのみ役に立つ事実や技能を青少年に教えるもうとする主な理由は、これらの青少年がおとなになったとき、彼らが三年から十年も前に学んだ事実や技能を使うにちがいないという予想からである。だから、この種のカリキュラムは、それが次の世代でも、この知識や技能が役に立つのだということを正確に予言できなければならないはずである。だが、やがてこういう困難にぶつかるといふのでは、その困難を乗り切るのに必要な知識や技能を身につけるように動機づけることはむずかしい。こういうことは、二五年前のハイスクールでは重要な問題ではなかった。なぜかというところの当時の中学校の生徒というのは、えらばれた集団であって、彼らは本の勉強さえしていれば十分だったのである。学習する前に、それが役に立つか立たないかを証明してもらいたいということを要求するような人びとは、すぐに農業や工業に従事すればよかった。だが、この二五年の間に学校の姿はすっかり変わってしまい、ハイスクールの年齢の大部分の青少年は学校に席をおくようになったのである。だから、当然、われわれはハッキリとあるいは

漠然と「なぜ私はこんなことを学ばなければならないのですか？」という質問をする多くの生徒を扱わなければならないようになっていく。そうなれば、「今やっていることは十年後に役に立つのだから、一生懸命勉強しなければいけない」といおうものなら、大部分の生徒はその晩映画に行ってしまうだろう。

たとえ、カリキュラム計画者たちが正確な予言ができたとしても、また、学級教師が、将来役に立つものをいま学ぶように生徒の動機づけに成功したとしても、それには持続性（そのときまでもちこたえられる）という仮定が前提されているということは否定できないだろう。しかし、知識というものは、普通、それが使われているから身につけているのである、もし直接それが使われなくなればたちまち忘れられてしまうだろうということは、予想できることである。

(一) 欲求構成法

青少年の要求を通してカリキュラムの再構成をはかろうとする研究にとって、中学校カリキュラム委員会のおこなった仕事と、その刊行物である「一般教育における科学」は大きな刺激となった。その本は次のようなテーマをかかげている。すなわち、「一般教育の目標は、個人の潜在的な能力をできるかぎりひきだしてやり、民主社会にもっとも効果的に参加できるようにしてやりながら、生活の基礎的な分野で、個人の欲求を満たしてやることである」と。青少年の欲求を満たすという力点は自分の責任をはたすために新しい方法をつけた教師を生みだした。何世代もの間、教師は自分の生徒たちが憲法、ボイルの法則、ミルトンの詩といったようなものを知りたがっているといってきたのは事実である。だが、中学校カリキュラム委員会は、まずこういうおとなの考え方によって正当化されたような欲求を、いわゆる青少年の欲求から区別するという仕事からはじめた。

カリキュラム再構成にあたっておこなわれた青少年の欲求についての討議で、どの欲求をも、一般に応用できるという考えから印刷したのであるが、それはあくまでも、一般化のリストとして妥当するのであって、高度の抽象がおこなわれていることに注目しなければならぬと指摘した。

生徒の欲求に対して向けられた教師の関心は、ついで課程の内容や学級用具に向いていった。また、家庭および家族関係、容姿に対する注意、仕事の保証、レクリエーションの知的な選択といった作業單元が生徒の欲求を十分に満たしてやれることがわかると、こういった問題をコース・オブ・スタディの中に入れ、これを伝統的な組織をとった教科組織の中で実施した。また他の教師は、伝統的な教科領域の諸要求は、新しい内容をもった欲求を直接満たしてやる場合の障碍になることを知ったので、これをコア・カリキュラムとして、一人あるいは二、三人の教師が受けもつという新しい課程を作り出した。

学習の中で生徒の欲求を洞察していくという方法は、すばらしいものであった。いろいろな欲求、それを表現していく方法、こういったものは「読んで暗誦する」という伝統的な方法を背景においてやってみてしまった、より大きな社会的な仕事に参加したいという欲求は、個人主義的な競争をなくして、かれらを共同の仕事へと導いていった。このように、教師が生徒の欲求を満たしていくという方法には、生徒と教師による共同計画、委員会、パネルディスカッション、形式ばらない話しあい、円卓会議、劇化、ラジオ、映画、スライド、地図の共同製作、模範、学級新聞等が利用されるばかりでなく、地域が学習の場として、研究資料として、さらに活動舞台として活用されるのである。

欲求構成法の難点と強み

教師が欲求を直接みたしていくために、そのカリキュラムを再構成しようとするとき、いろいろの問題が起るだ

らうということ予想できる。まず第一に、ある集団のもっている欲求を、正確に予測することがむずかしいといふことである。新しい領域のカリキュラム構成に参加した教師が、身近な問題にあまりにも多くの時間をつかいすぎるというあやまちをおかすのは当然なことである。だが、この問題は、新しい領域のカリキュラム構成に関心をもちた教師たちが、あるスコープの内容について意見の一致がみられたとき、こういった問題、困難は姿をけすだらう。

第二に、生徒の直接的な欲求のうえにカリキュラムの基礎をおこうとすると、くり返しをどうするかという問題がおきてくる。直接重複する場合を考えると、くり返しということはそれ自身かならずしも悪いものではない、むしろ、適当なくり返しは学習を安定しさえするからである。われわれが実際に問題にしなければならぬのは、くり返して学習されることがらが学習するものにとって意味があるかどうかを知ることである。

さらに、管理者が解決に困難をきたしている一つの問題は重要な意味をもっている。今までの論議は、生徒がその学期中、またその学年中同じグループの中で活動しているということを前提にしている。このことは、グループを作る能力とか、ある同質的な基礎の上に、グループをつくるかという問題を問題にしているのではなくて、欲求構成法はグループが同じ場合に、カリキュラムの中で最も直接的で効果的な活動ができるということなのである。いいかえれば、このことは、管理者や計画者がこの問題の重要性を十分に考えてくれたならば、この計画は達成されるのだということなのである。

最後に、変化にとんだ背景を持つことが、学級活動を進めていくための強みになるという実例を示すことにしよう。シェーカーハイツのジュニア・ハイスクールの一教師は、すくなくとも十二の異なる学級・学校からきた六学年の生徒によって編成された第七学年のある学級を進んで受けもつて、生徒と教師が共同してある作業單元を計

画した。そのとき提案されたほとんどすべてのテーマに対して、学級の二、三人のものからいつも「もう、ぼくらはそれを去年ならってしまった」という声が出た。教師は、提案されたテーマをおぼわってしまおうとして発言を待ちかまえているのをたしなめて、こういったやり方に抗議する生徒といっしょに今までに学習してきたことは、もちろん、そのときにふれられなかった問題領域をもっとほりさげていくことを提案した。その教師は、「ある部分のことをよく知っている生徒は、学級の他のものの手助けをする専門家として役に立った。だが、その生徒は、他の部分では別の生徒から手助けしてもらった。だから、生徒集団の中に、この問題領域を以前既に学習したものがいるから、という理由だけで、その問題をその集団のカリキュラムからとりのぞくのはまちがっている」と、その結論を下した。

五 学校生活の統合

1 学校自治会

なんらかの形で生徒会をもたない学校は事実上まれである。それが生徒自治会であるばあい、教師はほとんどといってよいほど、それに参加しない。ところが、学校には、学校自治会とよばれ、生徒と教師の間の本当の協力関係をうちたてようとする、真剣なところをあらわすものもある。最悪の場合、生徒会は、どっちみち、指導的な生徒の小グループが衆目をあびる機会をもつ手段となったり、学校管理に必要な事務的、または管理上の仕事を無料でおこなう機関として、ただそれだけに奉仕させられることがある。学校自治会の最もよいことは、そこですべての生徒や教師が、直接的で、緊急な、しかも現実的な問題を把握し、研究し、決定し、実行にうつすことができることである。生徒自治会には、個人の尊厳とか価値にたいする尊重を、生徒のうちに発表させるより良い場が見

あたらないし、社会的参加の技術や、他人の福祉にたいする関係を指導するよい場所でもない。

生徒会に対するもっともな批判に次のようなものがある。

生徒会は生徒にとっても、教師にとっても参加できる広く十分な基盤がないということ。このことの大きな原因は、学校存立にかかわる種々の制約からきている。ある学校では生徒だけが、だれが活動方針をきめるか、だれが生徒の予算の分配をするかということの決定権をもっている。また他の学校では、生徒会は財政上の制限よりもむしろ知的な制限をもっている。一定の学年に選しない生徒は役目をもたないし、すくなくともある場合にはそれ相当の学年にならないと選挙権所有の資格をもてないときめている。この種の考えは、生徒会への参加が、体育と同様に生徒が本質の上無価値のゆえに学ぶことを欲しないものを学ばせようとする刺激になることを意味するようにも思われる。また組織的な学校自治会に参加することは、それ自体が学習であり、ときには教科書をマスターすること以上に重要かつ有意義であるという見方は間違っている。

生徒が参加する基盤が狭いという他の原因は、生徒会が意味のない事からを取扱うことにある。生徒会は、生徒の生活にも教師の生活にも関係のないこと、全体的な興味のないことをしていたのでは長続きしない。

「生徒会組織の特徴的な事実は、おとなの目的が支配的であるということである」と、生徒会の研究をしてきたケリーが報告している。すなわち、「多くの機関は、学校の福祉増進を考えるより数倍、生徒集団の福祉増進を考えている」と。リストにのっている目標の中には、生徒会の要求とが必要が目につくが、生徒会が、おとながおとなの日からみてもみ価値ある仕事をするように、青少年を説得するような機構にすぎないという批判はあつてい

る。生徒会の活動が、おとなの活動だとするならば、その活動は民主主義の訓練としてのぞましいか、あるいはのぞ